

産み育ての未来

The future of human reproduction

小西祥子（東京大学）

Shoko Konishi (The University of Tokyo)

子どもを産み育てることは人口を再生産することである。食事や労働と同じく、再生産は生物としての人間の最も基本的な営みの1つである。本報告では以下5点について議論のたたき台となるアイデアおよび情報を共有したい。

1) 人間の再生産はどの様に変化していくのか。

日本の2020年の全出生児のうち7.2%は生殖補助医療による出産であった。不妊治療の受診が増えれば今後さらに自然妊娠による出産が減少すると予測される。国内初の民間精子バンクは法整備の問題から2023年3月に活動を中止した一方で、報道によるとSNSによる個人間の精子提供が日本でも広く行われている。医療機関の外で行われる人工授精の実態に関する統計データはない。

2) 再生産の様相の変化は人口にどのような影響を及ぼすのか。

生殖補助医療が進歩すれば、自然妊娠を望めないカップルが子どもを授かる可能性が高くなる。しかし一方で、妊娠の「医療化」が進み、男女の性交による自然妊娠が減少すると推測される。男性からみれば、一夫一妻の家族で子どもを産み育てる社会と比べ、精子提供が頻繁に行われる社会では出生力の個人差が大きくなる。

3) 再生産の様相の変化は家族や社会にどのような影響を及ぼすのか。

産むことは精子と卵子の提供、受精、妊娠、出産から成るので、上記1) 2) の変化は産むことのプロセスを分解してそこに関わる人間を増やすことでもある。次世代をともに再生産する人間同士が必ずしも家族ではないという状況が今後さらに増える。逆に家族は必ずしも再生産を必要としない傾向が強まると予想されるが、そのことは社会にどのような影響を及ぼすであろうか。生殖をとまわらないセックスはヒトを含む動物に広く観察されるが、ヒトは他の動物と異なり、生殖にセックスを必要としなくなる可能性が高い。

4) 未来になっても変わらない、再生産に関わる人間の本質は何か。

子どもを産み育てて自らの遺伝子を子孫に残そうとすることは必ずしも人間の本質ではない。子どもを持たないことを積極的に選択する人もいる。

5) 人間自身が守るべき人間の本質はあるのか。

以上1) から3) の変化に対して、人間が自らの意思によって守るべき本質はあるのか。